

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 北田暁大

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



日本社会は右傾化しているか

あるいは「公共心」は失われているのか

情報学環

北田暁大

先進諸国で巻き起こる「バックラッシュ」

- トランプ現象
- ドイツでの「ドイツのためのオルタナティブAlternative für Deutschland」の伸長
- フランスにおける価値統合問題
- 日本における「在特会」

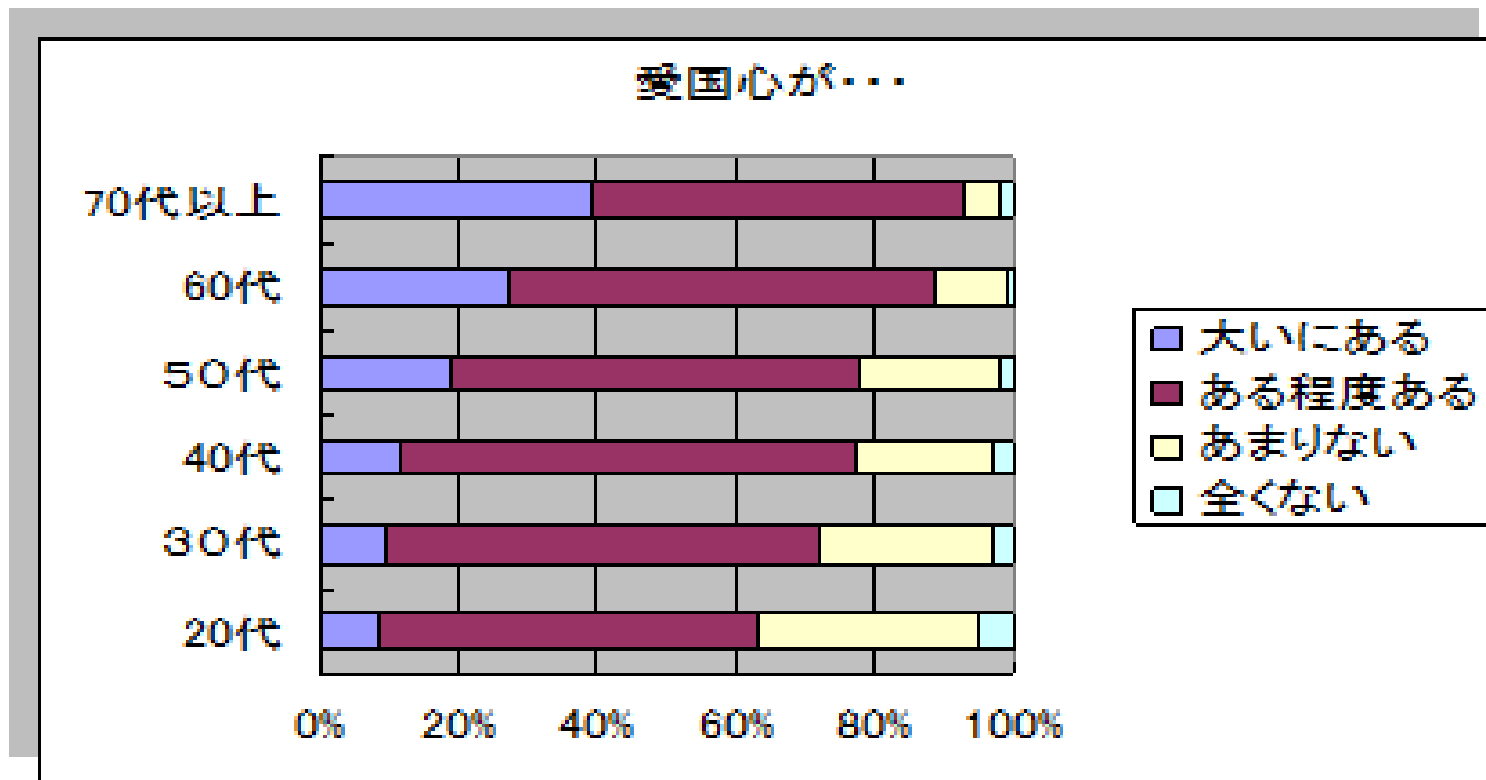
「現代的差別」 (高史明)

- 古典的差別: 「〇〇は△△に劣る」
- 現代的差別: 「差別は既に解消しているにもかかわらず、彼らは自分たちの努力不足による結果による“区別”を受け入れないどころか、不当な特権を得ている」
- 自己責任論とマジョリティの「被害者化」
長谷川豊公式ブログより、2016年9月19日の記事
http://blog.livedoor.jp/hasegawa_yutaka/archives/48479701.html
(記事タイトルは現在変更されている)

マジョリティの「逆襲」

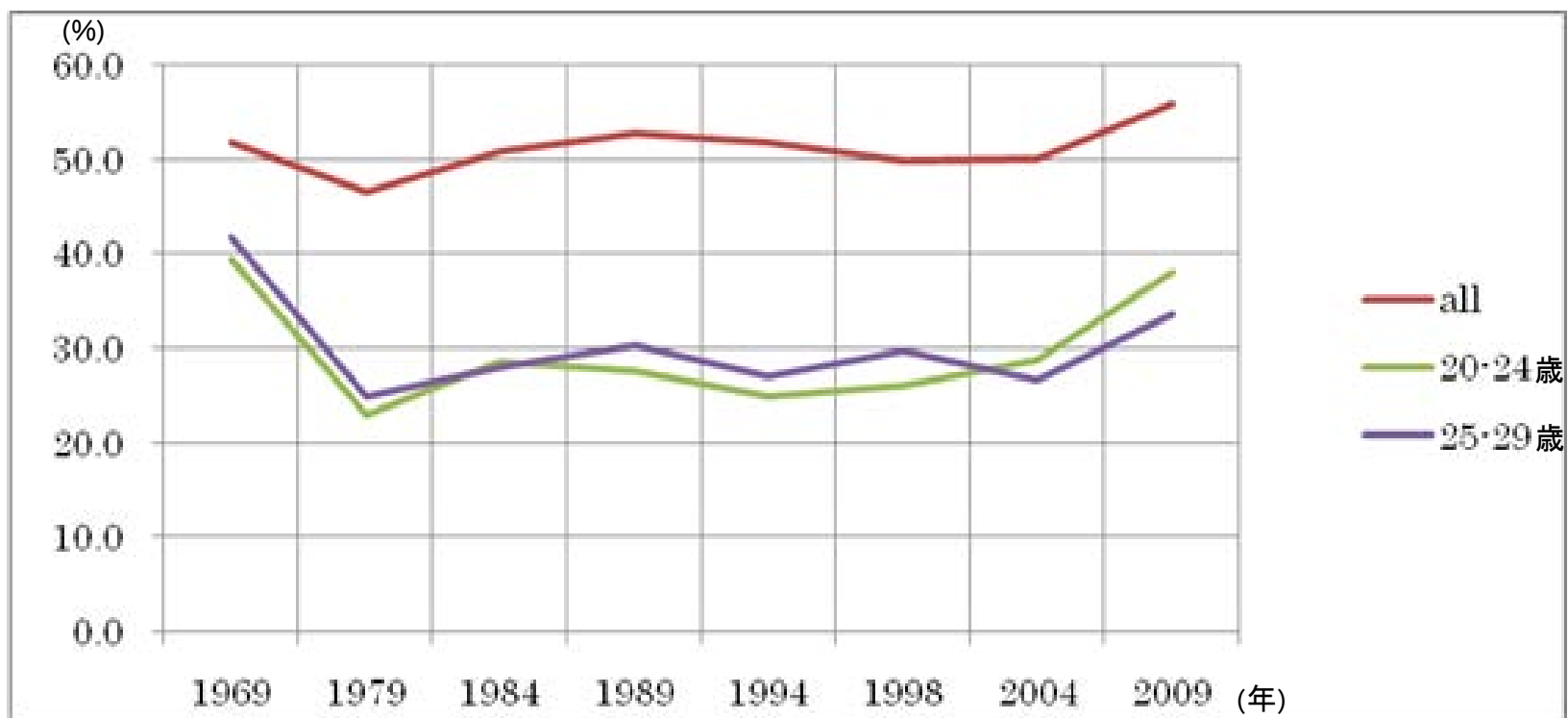
- 生活保護受給者バッシング
 - 「ニート」「ゆとり」バッシング
 - 「男性差別」「痴漢冤罪」
 - 「在日特権」
 - 「日本死ね」ブログバッシング
 - イラク人質事件における「被害者」バッシング
 - 「差別はもう存在しない」
- ➡ 制度的背景を勘案しない相対的剥奪感の肥大
- ➡ 「過度なPC（建前）が言論や思想の自由を奪っている」？
- ➡ マジョリティの逆襲＝保守化なのか？

愛国心は高まっているのか？



データ：「朝日新聞社世論調査」（2006年12月実施）より。

「社会意識に関する世論調査」(内閣府大臣官房政府広報室)
Q「あなたは、他の人と比べて、『国を愛する』という気持ち強い方だと思えますか。それとも、弱い方だと思えますか？」



データ：「社会意識に関する世論調査」(内閣府大臣官房政府広報室)より、各年のデータを使用。

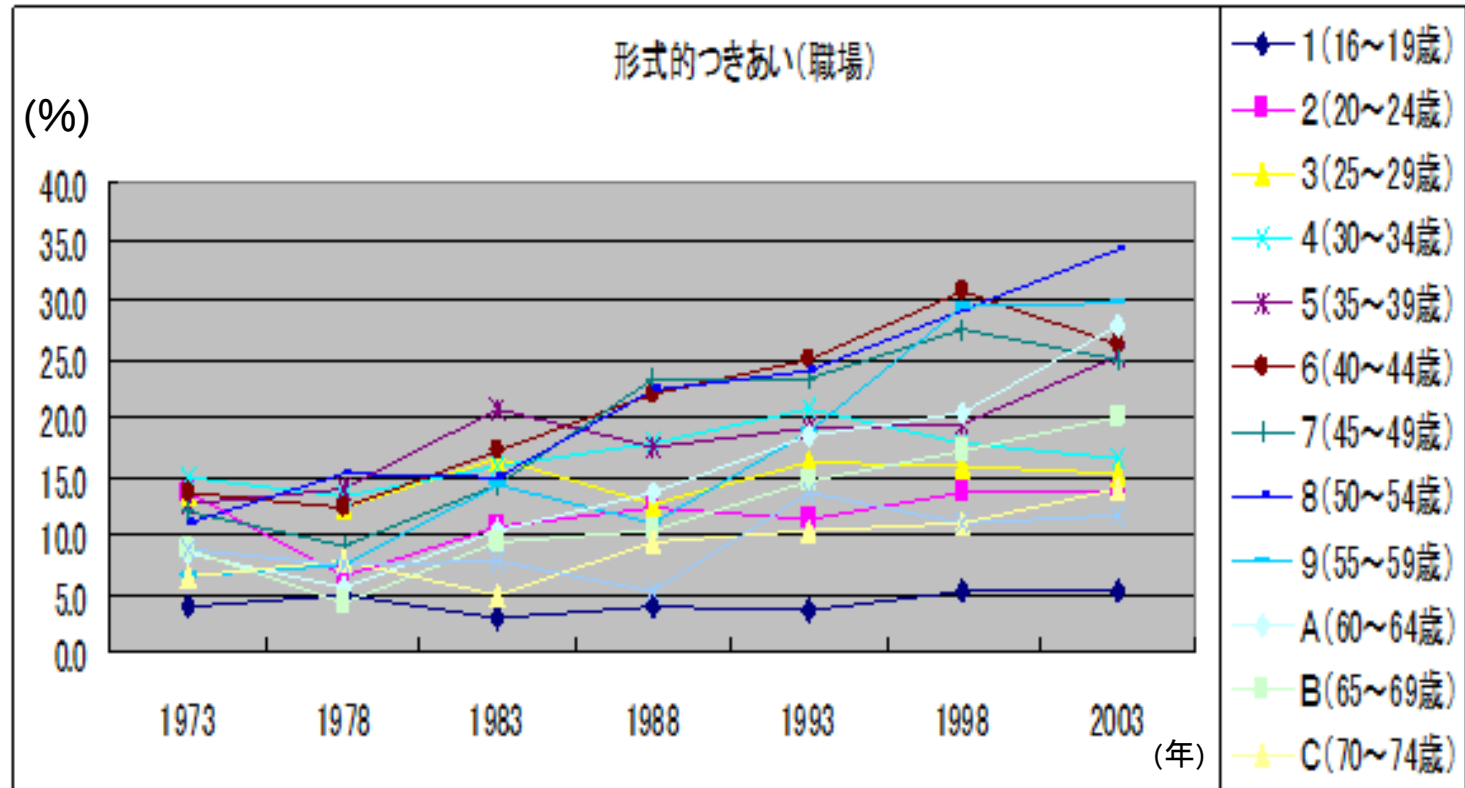
時系列変化のポイント

- 年齢効果
- コーホート効果
- 時代効果

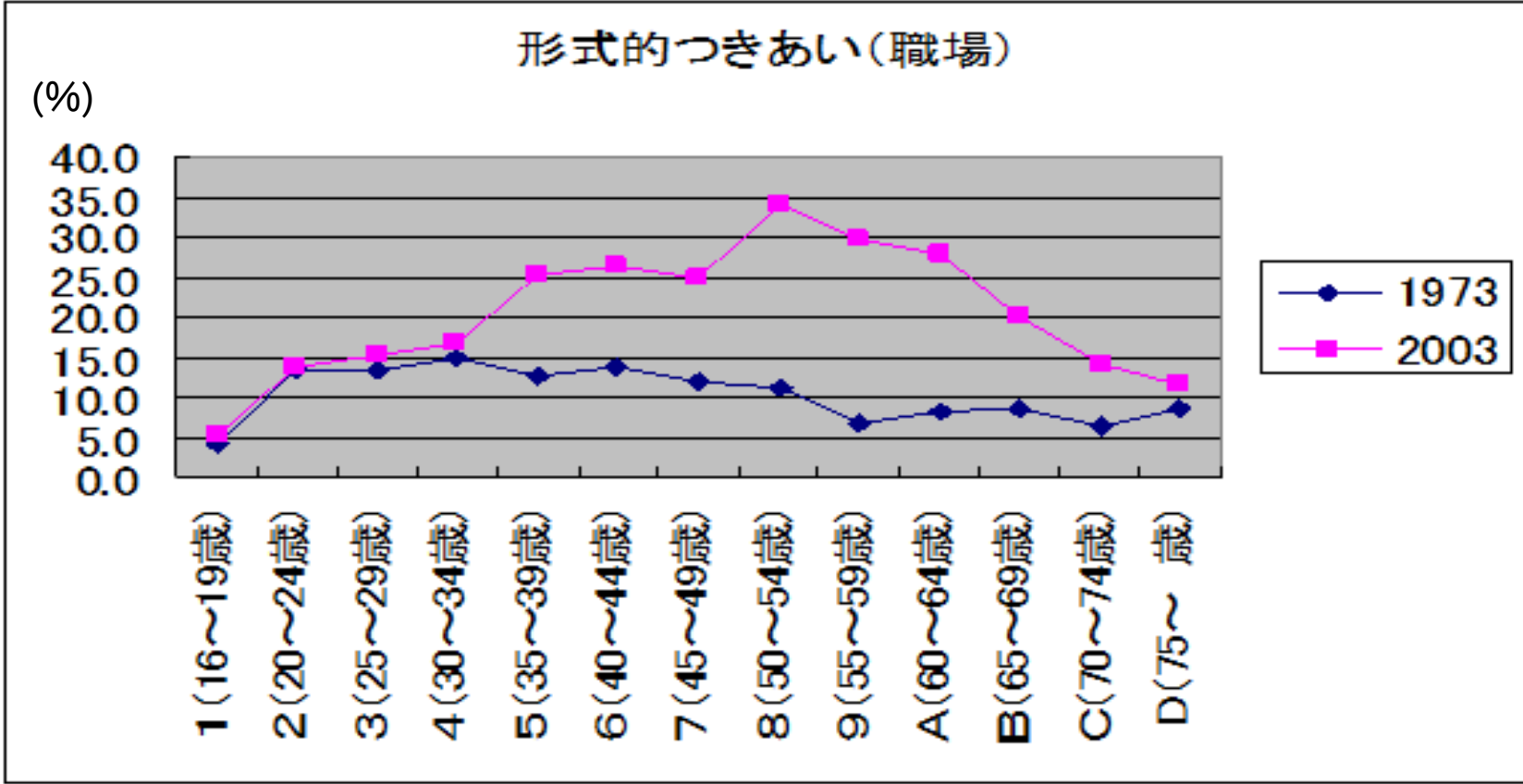
- 観察のバイアス

「若者の関係の希薄化」

- NHK放送文化研究所「日本人の意識」調査
- 親戚・近所・職場における人間関係について、問うた質問項目。
- ①「何かにつけ相談したり、助け合えるようなつきあい」という全面的関係、
- ②「挨拶する」「一応の礼儀を尽くす」「仕事に直接関係する範囲のつきあい」という形式的関係、
- ③「気軽に行き来できる」「仕事後も話し合ったり遊んだりする」部分的関係



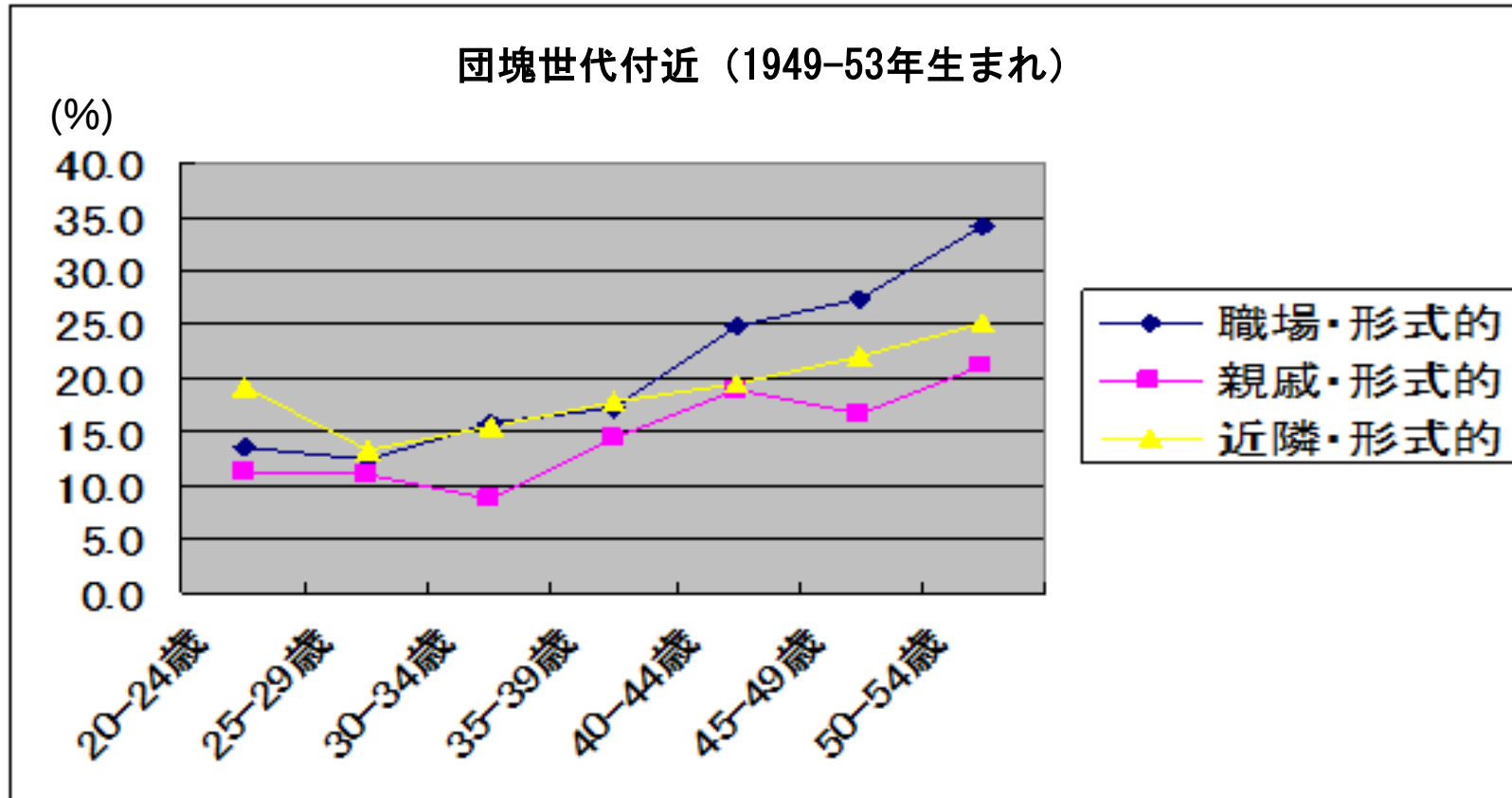
データ：NHK放送文化研究所世論調査「日本人の意識」より、各年のデータを使用。



データ：NHK放送文化研究所世論調査「日本人の意識」より、各年のデータを使用。

- 「今の若者は（会社で）昔の若者より形式的な人間関係を望んでいる」というのは疑ってかかっている議論だといっているだろう。
- むしろ、「会社で中堅以上を担う年齢層が、以前よりも「形式的」な人間関係を望んでいる」といったほうがよい。特に50代の変化は著しい。つまり、「30年前に若者であったような世代が、昔のオトナよりも「形式的」である」
- 2006年の読売新聞調査では、「関係が希薄化した」に「そう思う」と最も多く答えたのは40代、ついで50代だということ。つまり、働き盛りの世代は、＜自分たち自身が職場での「形式的なつきあい」を望み＞つつ、一方で＜「世の中一般において、人間関係が希薄になりつつある」と感じている＞年代であるわけだ。若者が昔に比べて職場での人間関係をドライに捉えるようになったわけではない。むしろ年長者のほうがドライになっている。その彼らは一方で、「世の中一般の人間関係が希薄になった」と実感している。

団塊世代付近（1949-53年生まれ）



データ：NHK放送文化研究所世論調査「日本人の意識」より、各年のデータを使用。

「若者論」の理由

- 「自分の若い頃と現在の自分との落差の観察」が、「世の中一般の昔と今」の差異として捉えられる。そして、「昔と今」の差異をもたらした要因として、新しい世代・若者が見出されてしまう。
- 世代語りというのは、往々にして「自分の世代は変わらないのに、若い世代は…」というように、自分自身を固定的なアクターとして設定するものなので、変化部分は他の世代の変化によって説明されることとなる。
- その際に、「若い世代がドライになっている」という説明図式が呼び出されてしまう。

「...化」という議論の注意点

- たとえば、18世紀フランスの社交界の文化と、現在のパリのサブカルチャーを比較し、文化の変化を語るのがおかしいということは誰にでもわかるだろう。橋元の指摘する大学生の変容と同じことで、それらは漠然と文化としてくくられているが、ある観点から「同じ」とされるものの「変化」とはいいがたい。それは端的に「違うもの」を並列させているだけかもしれない。